CALENDAR
一月
第46回

歳時世相篇

新年が年に四回やってくる

一月一日、日本の新年。
初詣に出かける人、家でゆっくり過ごす人、休日を活かして海外へ旅行する人。
日本国内でも新年の迎え方はさまざまだ。
そして、歴史も文化も異なる異国の地では、人びとはどのように新年を迎えるのだろうか。
さまざまな民族を抱える東南アジアのある国について見てみよう。

関本照夫（せきもとてるお）
民博 先端人類科学研究部

一月なので、新年の祝日について書こうと思う。それも一年三六五日の内に新年の祝日が四回やってくる国について。新年が次々にめぐってくる。それぞれが国の祝日なので職場も学校も休みになる。日本もこうだったら良いのにと、つい思ってしまう。インドネシアの話である。

西暦の新年

インドネシアでも普段の生活は西暦の暦に従って進行しており、日本と同じくカレンダーは西暦の一月一日からはじまる。この日は「キリスト暦新年」の祝日である。インドネシア語で「マセイの新年」とよばれるが、マセイとはメシア、救世主すなわちキリストのことである。「国際的新年」「太陽暦新年」などともいう。特に伝統的行事があるわけではないが、首都ジャカルタのような大都市では、大晦日（おおみそか）の晩に人びとが街頭にくり出して大騒ぎし、午前零時に年が変わると花火が次々に上がり、みんなてんでに紙製のラッパをブーブー吹き鳴らす。一方、地方で暮らす人を見ていると、この日が休日となる学校生徒・勤め人を除けば、特に祝日の雰囲気はない。

中華新年

これから紹介する三つの新年はそれぞれの暦に従っており、西暦の特定の日付に固定されてはいない。ここからは西暦二〇一二年の例で話を続けよう。一月二三日には太陰暦の新年がやってくる。日本で旧暦といわれる月の満ち欠けに従う暦の新年であり、日本ではほとんど忘れられているが、韓国、中国、ベトナムでは長い休暇を伴う盛大な祝日となっている。インドネシアでこれを「イムレク新年」とよぶのは、中国南方方言の「陰暦」からきたことばだからだ。また「中華新年」ともよばれ、国の人口の三・五パーセントを占める中華系住民（以下華人という）の祝事と認識されている。華人はほとんどが都市部に住んでおり、商業地区には華人が営む商店が多い。また必ず中華寺院がいくつもある。それで都市の人が集まる繁華街は新年を祝う情景で埋め尽くされる。赤いランタン、赤い紙に書かれた新年の祝辞、獅子踊（ししおど）りの賑やかな行列、寺詣りの人びとの群れ。デパートや商店街はどこへ行っても新年大売り出しである。華人以外の住民も、この賑わいを楽しんでいるようで、獅子踊りの舞や楽器奏者にはジャワ人の子どもや若者が混じっていたりする。

中華新年の期間を締めくくる元宵節 (Cap Go Meh) のイベント。シンカワン市 西カリマンタン州（撮影・津田浩司）

バリ人の新年

三月二三日はバリ人の新年である。バリでは何種類もの異なる暦が平行し、絡み合って、日本人にはとてもややこしく見えるのだが、そのなかでインド起源の太陽暦であるサカ暦新年に当たるこの日は「ニュピ、静寂の日」とよばれる。その前日の夕方には方々で爆竹が鳴り、子どもたちは鳴り物を鳴らして練り歩く。だが日が沈むとともに人びとは家で明かりを消して閉じこもる。二日目の朝まで、労働、火を使う炊事、外出は禁止である。交通が止まり、店も食堂も閉まるので、知らずにこの日バリを訪れた旅人は苦労することになる。バリ人が多数まとまって暮らしているのはバリ島と東隣のロンボク島西部なので、それ以外の地域のバリ人でない住民には、国の祝日だという以外あまり意識されずに過ぎてしまう新年である。

イスラムの新年

二月一五日はイスラム暦の新年にあたる。西暦の二〇一二年なら「ヒジュラ一四三三年新年」とよばれる。ジャワでは「スロ月一日」とよばれることも多い。アラビア語でイスラム暦一月はムハッラム月というが、ジャワ人、特に年配の人びとはスロ月というジャワ・イスラム暦の用語に慣れている。イスラムにおいて暦のうえの重要な祝日はイスラム暦第一〇月の「断食明け大祭」と第一二月の「犠牲祭」であり、一月一日は特に重要視されない。この日は、イスラム暦の新年だという以上に、ジャワ神秘主義者たちにとって重要な日である。一般にクバティナンとよばれるジャワ神秘主義とは、イスラム神秘主義が強くジャワ化し、近代西欧の神智学（しんちがく）にも影響を受けた信仰であり、個人の瞑想（めいそう）・修行を重視する。信者たちはこの日、前夜から聖山ラウ山に登って滝に打たれたり、一晩中、川の水につかって瞑想したり、あるいはもっと手軽に自室にこもり食や睡眠を断って瞑想をする。

新年が何度もやってくる国は、特に珍しいわけではない。多民族・多宗教の共存を建前とする国では、そうなるのがむしろ当然だろう。それにしても、インドネシアに一年間暮らし、次々にやってくる新年を経験すると、「あれよ、あれよ」と思ってしまう。それぞれの民族や宗教ごとに自分たちの新年を祝うにとどまらず、四つの新年を全部国の祝日にしてしまい、少なくとも理論上は他の民族や他宗教の信者も巻き込んでしまったのは秀抜なアイデアだと思う。だが、インドネシアの国内でも国の祝日から漏れ無視されているさらに別の新年が、まだまだあるかもしれない。